様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　３　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520147
研究課題名（和文）　20 世紀ロシア文化における他者表象の研究

研究課題名（英文）　Study on the Representation of <the other> in the 20th Russian Literature

研究代表者　中村　唯史
（NAKAMURA TADASHI ）
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：20250962

研究成果の概要：
20 世紀のロシア文化における「他者」および他者性の問題を、基本的には記号論や脱構築の方法に立脚し、近年のポストコロニアリズムの成果をも批判的に参照しつつ、考察した。研究対象は 20 世紀文学におけるコーカサス表象を中心とし、またその淵源である 19 世紀ロシア文学についても遡及的に分析を試みた。また他者の問題を考察する過程で、ロシア文化における自己表象に関しても言及した。論考、学会発表、論集への寄稿、講演等を通じて、成果の積極的な公開に努めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,100,000	0	1,100,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,000,000	360,000	3,360,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：ロシア、他者、表象、コーカサス

１．研究開始当初の背景

（１）
研究代表者は、20 世紀前半のユダヤ系ロシア語作家イサーク・バーベリの作家研究から出発し、彼の出身地である黒海沿岸の貿易植民都市オデッサの文学的トポスの考察を通じて、ロシア文化における周縁やマイノリティの表象の問題に関心を抱くに至った。

（２）
その一方でロシア・フォルマリズム、ミハイル・バフチン、ユーリー・ロトマンなどソ連記号学の系譜に方法論的な関心を持ち、とくにロトマンを中心とするモスクワ・タルトゥー学派とその理論的・実践的な射程の考察――平成 14－16 年度科学研究費補助金若手研究（B）「ソヴィエト記号論(モスクワ・タルトゥー学派)の位相とその哲学的・歴史的系譜の研究（研究課題番号：14710361)」――に従事し、一定の成果を得た。

（３）
「自己」「他者」は記号学の最も基本的な

装置である。研究代表者は、(2) と同時期の平成 14－16 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究（研究代表者：望月哲男、研究課題番号：14310217）の共同研究に参加し、ソ連記号学の方法や概念の応用に基づき、現代ロシア語文学作品の分析を種々試みることを通じて、近現代ロシア文学を考えるうえでの「自己」「他者」表象の研究の有効性と重要性を認識するに至った。

（4）
本研究は、上述のような、研究代表者の従来からの複数の関心の延長線上に、それらが交差する問題を取り扱う目的から構想された。

2．研究の目的
（1）
ロシアのナショナル・アイデンティティを西欧的な枠組で語ることの困難は以前から指摘されていたが、ロシアにおけるネーション意識の成立期に「他者」として強く意識されたコーカサスの表象を取り上げ、その成立過程や構造に焦点を当てた。
19 世紀についてはすでに一定の学術成果が存在したので、20 世紀のソヴイエト期に重点を置いた。ただし、その淵源として前世紀をも視野に入れる可能性は排除しなかった。

（2）
前項の考察を通じて、「他者」の対概念である「自己」に関するロシア語文芸における表象をも、逆照射するかたちで考察を試みた。

（3）
以上のような作業の結果として、ロシア（ソ連）文芸におけるナショナル・アイデンティティの一般性と特異性を明らかにしようとした。ただし、その際に、いわゆるロシア特殊論の陥穽におちいったり、逆に立脚したりするのではなく、あくまでも具体的なテクストの分析を基盤とした帰納法を旨とする体系構築をめざした。

3．研究の方法
（1）
主たる研究対象は、上述の理由から、他者としての 19－20 世紀のロシア文芸におけるコーカサスの表象であった。また他者の対概念である自己表象の考察のために、20 世紀のロシア文芸におけるいくつかの事例も対象とした。

（2）
主たる分析装置は、ソ連記号学および脱構築の概念や方法であり、これらの適用を通じて、コーカサスをめぐる様々な言説の個別的な分析を重ね、19－20 世紀ロシア文学においてコーカサス・テキストに作用していた諸力の相関関係の解明を図った。自己表象の考察についても、分析装置は同様であった。

（3）
ロシア文芸におけるコーカサス表象の問題は、単に文芸学の枠内に留まることなく、オリエンタリズム、ポストコロニアリズム、また実証的な地域研究とも接点を持っている。文芸学の立場を維持するとともに、これらの思潮および学問分野の最新の成果や見識に積極的かつ批判的に触れ、研究方法の新しい展開を図った。

4．研究成果
（1）
20 世紀ロシア語文学におけるコーカサス表象の構造と系譜については、なお不十分ではあるが、日本で初めて概観を示した。〔雑誌論文〕3、〔学会発表〕2、〔図書〕4。ただし歴史学の分野から、ソ連の民族政策についての記述がやや図式的であるとの批判を受けた。

（2）
上記の淵源である 19 世紀ロシア文学におけるコーカサス表象の系譜については、既存の研究よりもつよく記号学的な枠組に立脚して、プーシキン、レールモントフなど、とくに近代ロシア文学確立期に関する研究に一定の成果を挙げた。〔雑誌論文〕5、〔学会発表〕1、〔図書〕1・5（59 章）。

（3）
20 世紀ロシア語文芸におけるナショナル・アイデンティティや自己の表象について、現代小説の翻訳解説、ロシア・フォルマリズムをめぐる論考、ブック・レビュー等を通じて、多面的な成果を挙げることができた。〔雑誌論文〕1・2・4・6・7、〔図書〕3。

（4）
ポストコロニアリズム、オリエンタリズムを踏まえつつも批判的な立場から、ロシア語文学の枠を越え、ソ連期における「民族文化」の位相に関して、とくに北コーカサスをフィールドとする考察を試みた。〔図書〕2・5（45 章）。ただし地域研究の分野から、現地語の知識や実証性の欠如について批判を受けた。

（5）
本研究の成果は、次項の記載のほかに、公開講座における講演等にも反映することができた。主なものとして以下の３つを挙げる。

①. LICCOSEC 国際ワークショップ「ソ連の言語・文化政策とその影響－グルジアの事例から考える」コメンテーター、2009 年 2 月 21 日、於大阪市千里ライフサイエンスセンター。

②. 中村唯史、ソヴィエト連邦におけるコーカサス諸民族文学の位相、国際交流基金 2007 年度第 1 期中東理解講座「文明の十字路・コーカサスの諸相」、2007 年 7 月 30 日、於ジャパンファウンデーション国際会議場。

③. 中村唯史、「コーカサスの虜」たち：ロシア文学に表れたコーカサスのイメージ、北海道大学スラブ研究センター平成 18 年度公開講座「多様性と可能性のコーカサス:民族紛争を超えて」、2006 年 5 月 26 日、於北海道大学。

（6）
研究成果の総括は以下のとおりである。
近現代ロシア文芸における「他者」表象の問題については、コーカサス表象の分析を通して、一定の実績を挙げることができた。とくに従来ほとんど手つかずだった 20 世紀ロシア語文学におけるコーカサス表象の概観を行ったこと、また 19 世紀ロシア文学のこの表象に対して記号学的なアプローチの確立を試みた点は成果である。ただし両者のあいだをつなぐ 19 世紀後半期の考察、とくにトルストイ分析の論考化は、今後の課題として残された。
他者の対概念である「自己」表象の分析は、コーカサスに限定することなく、さまざまな文化現象を対象として多角的に展開することができた。
その一方で、ロシア語ロシア文学の枠を越えて異言語・異文化接触の問題に取り組もうとした試みは、実証的な論証に弱点を露呈し、歴史学や地域研究の専門から一定の批判を招くこととなった。
以上のような認識と反省を踏まえ、研究代表者は今後、ロシア語文学という対象および研究分野の相対性と条件性を考慮しつつ、ロシアおよびソ連の言語思想・文化思潮が異文化・異言語をどのように定位しようとしたか、その哲学的・宗教的系譜の研究を、主として文化史的・理論的な見地から進めていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

① 中村唯史、歴史への内在：ボリス・エイヘンバウムの世界観、山形大学人文学部研究年報、査読有、6 号、2009 年、121-142 ページ。
http://www-h.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/pdf/nenpou6.pdf

② 中村唯史、テキストに寄り添い，音色に耳傾けて，底に響くかすかな基調を聞き分ける：現代ロシア文学への道案内（書評：岩本和久著『トラウマの果ての声—新世紀のロシア文学』）、図書新聞、査読無、2865 号、2008 年、4 ページ。

③ Накамура Тадаси、Литература и границы: Кавказ в русской литературе. Осип Мандельштам и Андрей Битов（ロシア語「文学と境界：ロシア文学におけるコーカサス。マンデリシタームとビートフ」）、Tetsuo Mochizuki (ed.) Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context (Slavic Research Center of Hokkaido University)、査読有、2008、pp.255-277.
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no17_ses/13nakamura.pdf

④ 中村唯史、同時代現象ペレーヴィン、ロシア文化通信「群」（群像社）、査読無、30 号、2007 年、3 ページ。

⑤ 中村唯史、「コーカサスの虜」たち：ロシア文学に表れたコーカサスのイメージ、しゃりばり（北海道総合研究調査会）、295 号、査読無、2006 年、42-45 ページ。

⑥ Накамура Тадаси, Необратимое "вычитание" в поэтике Иосифа Бродского（ロシア語「ヨシフ・ブロツキーの詩学における不可逆的減法」）, Literatura mit Sacrum Kultura (Poland, Marry-Currie University), 査読有、2005, pp.197-206.

⑦ 中村唯史、文学の王国が失われた後で：ソ連崩壊後のロシア文学、沼野充義[編] ポスト共産主義時代のクロノトポス：「ポスト共産主義時代のロシア東欧文化」研究会成果論集、査読無、2005 年、23-35 ページ。

〔学会発表〕（計　2　件）

① Nakamura Tadashi, Вид Кавказа: с точки зрения русской литературы（ロシア語報告「コーカサスの光景：ロシア文学の見地から」）、国際会議“In search of the Caucasian Culture: Seeking New Perspectives through Dialogues between Philologists and Historians”、2008年1月30日、於京都大学百周年時計台記念館。

② Nakamura Tadashi, Литература и границы: Кавказ в русской литературе（ロシア語報告「文学と境界：ロシア文学におけるコーカサス」）、国際シンポジウム“Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context”、2006年12月14日、於北海道大学スラブ研究センター。

〔図書〕（計　5　件）

① 中村唯史、北海道大学出版会、前田弘毅［編著］『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』、2009年、155-183ページ（第五章「特権的トポスのはじまり：コーカサス表象の原型と“他者の声”について」）。

② 中村唯史、講談社、松里公孝［編］『講座スラブ・ユーラシア学3：ユーラシア－帝国の大陸』、2008年、106-136ページ（第三章「“ソ連多民族文化”とダゲスタンのアヴァル語作家ラスル・ガムザトフ」）。

③ ヴィクトル・ペレーヴィン著、中村唯史訳、角川書店、『恐怖の兜』、2006年、総287ページ。

④ 中村唯史、彩流社、木村崇、篠野志郎、鈴木董、早坂眞理［編著］『カフカース：二つの文明が交差する境界』、2006年、311-342ページ（第10章「原初への遡行、他者との出会い：二〇世紀ロシア文学のカフカース表象を考える」）。

⑤ 中村唯史、明石書店、北川誠一、前田弘毅、廣瀬陽子、吉村貴之［編著］、『コーカサスを知るための60章』、2006年、235-239ページ（第45章「伝統と政治のはざまで：北コーカサスの国民文学」）、315-319ページ（第59章「ロシアから見たコーカサス：文学における最も身近な“他者”」）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕
なし

6．研究組織
(1)研究代表者
中村　唯史（NAKAMURA TADASHI）
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号:20250962

(2)研究分担者

(3)連携研究者